

令和七年 師走 779号

ふなगत

目次

沖中両宮秋季大祭

今月のおまつり・厄年一覧

第十二回宗像国際環境会議

神宝館だより・みこころ

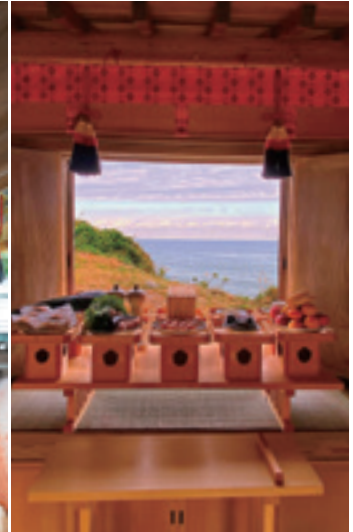
宗像大社歌会詠草

御造宮奉賛者御芳名

7 7 6 5・4 3 2

よつぎ 本年も大相撲九州場

所が盛大に開催され、県内各地では多くの相撲部屋が宿舎を構え、力士や関係者たちで大いに賑わった▼史実に見える相撲の記録は、日本書紀にある、野見宿禰(のみのすくね)と当麻蹴速(たいまのけはや)の力比べがその始まりとされ、勝利した野見宿禰が相撲の祖として敬われている。この相撲は、奈良時代に宮中で年中行事の一つとして催され、鎌倉時代になると幕府の将軍や有力武将などにも好まれるようになる。江戸時代に入ると社寺の修繕費などの資金を集めるために勧進相撲が盛んに行われるようになり、この組織が発展、改組しながら、現在の大相撲につながっている▼大相撲の土俵入りのとき、力士は拍手を打つが、これは土俵には神が宿るとされている為である。本場所初日の前日には、立行司を斎主として土俵祭が行われる。この祭りは、新しく作った土俵の地鎮祭の儀式にあたるもので、斎主となる行事は祝詞を奏上し、供物を捧げて場所中の安全と興行の成功、さらには国家の安泰、五穀豊穡を祈念する▼現代の相撲は、神事としての儀式を保持しつつ、スポーツとしての側面も強調されている。普段何気なく目にしている力士たちの一挙手一投足にも、相撲が日本の国技として受け継がれてきた意義と、次世代へ受け継ぐべき伝統が込められている。(神)



沖中両宮秋季大祭

沖津宮・中津宮の秋季大祭が十一月三日・四日にわたり斎行された。

三日、午後四時より地主祭、同五時より中津宮並びに沖津宮遙拝所にて宵宮祭が斎行され、多くの氏子が参列した。

翌四日、午前八時三十分より宮崎区の厳島神社、同九時より沖津宮遙拝所、同九時三十分より中津宮荒魂を奉斎する御嶽神社、それぞれに神職が参向し秋季大祭が斎行された。同十一時より中津宮にて秋季大祭が斎行され、多くの氏子や崇敬者が参列した。氏子奉幣使は丸井安氏にお務めいただいた。

直会の後、午後一時三十分から本殿横の特設舞台にて奉納演芸大会が開催され、島内外の老若男女、また当社職員も出演し大いに盛り上がりを見せ、神人和楽の一時を楽しんだ。

秋季大祭斎行にあたり、準備から片付けに至るまでご奉仕いただいた氏子の皆様に紙面ではありますが御礼申し上げます。

今月のおまつり

古式祭

十二月十四日(日)午前六時

特殊な神饌(九年母・ゲバサ藻・菱餅)を神前にお供えする祭りで、八百年以上続いています。

祭典後は、六時半からお供え物を戴く御座があり、初穂料一名二千円でどなたでもご参加できます。御座券は当日、午前五時半から配布されます。

大祓式 除夜祭

十二月三十一日(水)午後三時

一年の終わりにあたり、罪や穢れを祓い清め、新しい年を清々しく迎えるためのお祭りです。引き続き本殿にて除夜祭が執り行われます。

人形大祓神事をご希望の方は、社務所までお問い合わせ下さい。尚、詳細は公式ホームページからもご覧頂けます。



令和8年 厄年一覧表

| 生まれ年 | 厄年 | 年齢(数え) | 生まれ年 | 厄年 | 年齢(数え) |
|-------|-------|--------|-------|-------|--------|
| 大正11年 | 暗剣殺 | 105 | 昭和61年 | 前厄(男) | 41 |
| 昭和2年 | 八方塞 | 100 | 平成元年 | 後厄(女) | 38 |
| 昭和6年 | 暗剣殺 | 96 | 平成2年 | 八方塞 | 37 |
| 昭和11年 | 八方塞 | 91 | 平成3年 | 前厄(女) | 36 |
| 昭和15年 | 暗剣殺 | 87 | 平成5年 | 後厄(女) | 34 |
| 昭和20年 | 八方塞 | 82 | 平成6年 | 大厄(女) | 33 |
| 昭和24年 | 暗剣殺 | 78 | 平成7年 | 前厄(女) | 32 |
| 昭和29年 | 八方塞 | 73 | 平成11年 | 八方塞 | 28 |
| 昭和33年 | 暗剣殺 | 69 | 平成13年 | 後厄(男) | 26 |
| 昭和38年 | 八方塞 | 64 | 平成14年 | 大厄(男) | 25 |
| 昭和40年 | 後厄男女 | 62 | 平成15年 | 前厄男 | 24 |
| 昭和41年 | 大厄男女 | 61 | 平成19年 | 後厄(女) | 20 |
| 昭和42年 | 前厄男女 | 60 | 平成20年 | 八方塞 | 19 |
| 昭和47年 | 八方塞 | 55 | 平成21年 | 前厄(女) | 18 |
| 昭和51年 | 暗剣殺 | 51 | 平成24年 | 暗剣殺 | 15 |
| 昭和56年 | 八方塞 | 46 | 平成29年 | 八方塞 | 10 |
| 昭和59年 | 後厄(男) | 43 | 令和3年 | 暗剣殺 | 6 |
| 昭和60年 | 大厄男 | 42 | | | |

厄年

人生の節目であるとともに、一生のうちで災難、『厄』にあう恐れが多いため、慎まねばならない年です。特に男性の42歳、女性の33歳は『大厄』とされています。

八方塞

男女の別なく九星(星回り)にもとづいて災難に遭いやすいとされる年です。

暗剣殺

「九星術」でその年の五黄土星と相對する方位で、最も慎まねばならないとされる大凶の年廻りとされています。

※厄年のお祓いは年始から節分までに行なうのが良いとされています。



MUNAKATA ECO
International Symposium

第十二回 宗像国際環境会議 常若 未来を拓く

十月二十六日から二十八日、宗像大社を会場に海の環境再生に向けて議論、活動する「宗像国際環境会議」が開催された。

十二回目となる今年のメインテーマは「常若 未来を拓く」と題して、産官学、多様な講師をお招きし、八つのセッションが展開され、フィールドワークとしてビーチクリーンと竹魚礁作り、更には、イベントブースも設置され、大いに賑わいを見せた。

十月二十九日には豊饒祭・稚魚放流行事が行われ、豊かな海山川を願い、約百名の園児がフグとタイの稚魚四〇〇匹ずつ、計八〇〇匹を放流。最後にはフィールドワークで作成した竹魚礁を沈め、四日に亘る環境会議一連の事業を締めくくった。

尚、本会議で採択された「宗像宣言」「若者提言」は本年も環境大臣へと報告される予定となっている。また、三日間のセッションの様子は十二月末には、youtubeにてアーカイブを配信予定のため、公式ホームページにてご確認ください。

<https://www.munakata-eco.jp/>

宗像国際
環境会議
YouTube





第十二回 宗像国際環境会議 「宗像宣言」

第十二回宗像国際環境会議では、「常若 未来を拓く」をテーマに、三日間にわたり議論を重ねた。人類社会は、とりわけこの一〇〇年で急速な発展を遂げた。しかし、その発展は後始末までを考えたものではなかったのではないか。いま、改めて顧みる必要に迫られている。

人間が欲望のままに作ったものが使い捨てられ、行き場をなくし、人間が生きる環境を壊している。日本人の古くからの生き方の基本は、汚れたものや壊れたものでも大切に再生することであった。この生き方を、現代人の生活と共生可能な形で再び実践できるかどうか。それが、まさに喫緊の課題となっている。

一度失ったものを取り戻すには長い年月を要する。しかし、私たちがこれまでの過ちに気づき、いまずぐ再生の種をまき始めれば、自然はこれからも力強く生命を循環させてくれる。そう、私たちは信じる。生命を未来へつなぐために、人間が自然の循環の一部であることを、一人ひとりが心にとめよう。効率だけを求めるのをやめ、思いやりの連鎖で、心と科学技術のバランスを取り戻そう。

ここ宗像に集まった私たちは、「常若」の精神のもと、「未来のきざし」「次世代への道しるべ」となるために、先人たちの叡智と伝統的価値観に学びながら未来を拓く行動を続けていくことを、ここに宣言する。

令和七年十月二十八日

宗像国際環境会議 参加者一同



神宝館だより 104

八万点ノ国宝収蔵

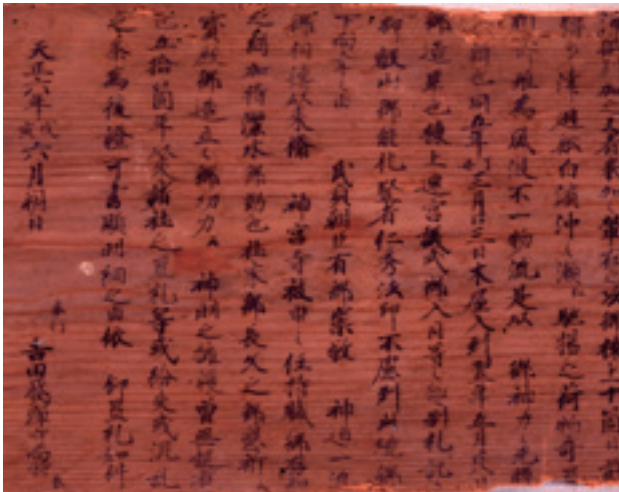
宗像社と海（五）

現在の宗像大社^{へつづぐう}辺津宮^{へつづぐう}本殿は、天正六（一五七八）年に造営された。当時の置札^{おきふだ}（棟上の際に工事の由緒などを記録し、保存しておく木札）には、弘治三（一五五七）年の本殿焼失以来、戦乱に次ぐ戦乱の中にあっても大宮司宗像氏貞が本殿の再興を諦めず成し遂げた、その経緯が記録されている。

四枚の置札の内「宗像第一宮御宝殿置札」は本殿造営をめぐる諸事情が詳述されている貴重な史料である。この記録の中に、前回ここで紹介した聖護院道増^{せいごういんどうぞう}と宗像社の寄物^{よりもの}（船の積荷）を巡るやりとりも記されている。結果として宗像社は正当な権利を主張して積荷を得、それを売却して造営費用を得た。この時宗像社では辺津宮^{へつづぐう}仮殿^{かりでん}建立の費用が高み、不意に海から流れ着いた品々には「希代の勝事^{しょうじ}」（世にもまれなふしぎな出来事）と驚き

喜んだようである。積荷の唐櫃^{からびつ}の中身は全て赤白の糸、その他は木綿等であつたという。

また本殿棟上の十日前にも博多津の廻船^{しらはま}が白浜^{しらはま}（現在宗像市地島^{じのしま}）沖に漂着し、この積荷も造営費に充てられている。激しい風波にも積荷は一つも流出せず、これも御神力の光輝あらたかなこと、と記録されている。（津）



宗像第一宮御宝殿置札の一部。博多津廻船の箇所（二行目以降）

みこころ

年の暮れ、心持ち慌ただしい日々をお過ごし

ことと存じます。早いもので、今年も残り一か月となりました▼私も奉職して二年目となり、この忙しい一年間でたくさんの方を学び成長したと感じております。菊花大会や大祓式人形などの係を任せて頂き、強い責任感を持って取り組みながらも、仕事が重なる時期には失敗も多く、涙を流すこともありました。令和七年巳年も終わりを迎えようとしています。巳（蛇）が脱皮を繰り返して成長する様子から再生や進化を意味し、巳を「実」に掛けて、実を結ぶ年とも言われています。自身もこの一年間で失敗を繰り返すことで成長の糧となり、実り多き年だったと実感しております▼さて、今月末には年越の大祓式がございます。大祓式にあたり「人形」を配布させて頂き、皆様の「家内安全」と「無病息災」を祈念いたしております。これから冬も深まり、体調を崩しやすい季節となつてまいります。是非、大晦日には大祓式にご参列頂き、来たる新年を清々しくお迎えください。（延）

第772回

宗像大社歌会詠草

■大西晶子選

■毎月25日メ切(順不同)

老いゆくは我のみにあらず食卓と机を兼ねるわが椅子がきしむ

吉崎美沙子

作者が年齢を重ねると同時に身の回りのものも古くなる。毎日使う食卓と机の用も果たしている椅子もきしむのだ。椅子に自身を重ね、老いを深く感じる作者をよく表している。

短命は弟にあり而うして義弟にありぬ明るきふたり

山崎 公俊

弟と義弟の二人を若くして亡くされた作者。二人と会う日はいつも楽しかったのだろう。大切な二人の弟を亡くした作者の喪失感が「而して」と響きの硬い言葉に表れているようだ。

一撃に時が止まった闇のあと顔をこわして泣くことを得る

東 雅子

よほど悲しいことが起きたのだと思われる。知らずに瞬あたりが闇になったようで、作者が泣くことが出来たのはしばらく後だったのだ。(顔をこわして泣く)に実感がこもっている。

臆病であつたからこそ今がある波に向うは恐ろしきこと

佐藤 守

作者の以前の職業を正確には知らないが船に乗っておられたようだ。船を出すのに臆病なくらいに慎重だったと思いつているのだろう、波の下を恐ろしさを熟知する作者ならではの感慨。

暑さに耐え色濃く咲いた彼岸花帰らぬ人を偲んで揺れる

本田エリナ

作者の帰らぬ人への想いを彼岸花に託して詠んだ歌。上の句の彼岸花への言葉は作者の亡き人を悼む思いの強さと長さを表しているようだ。花の名と死者への哀悼の意がよく合っている。

船団のうごく祭の湾内のへりをゆくなるフェリーの白し

佐々木和彦

宗像大社のみあれ祭の朝の様子か。大漁旗を掲げた船団が湾内をパレードしているが、それを邪魔しないようにフェリーが航行しているのだ。フェリーに目をとめたところに面白みがある。

木造の上多礼橋より飛込んで尻の型に川底の土へ

早川 祥三

思い出の歌。木造の上多礼橋から川の飛び込み遊んでいた作者は川底の土にお尻でその型を残す遊びをしていたのだろう。下の句を「川底に尻の型を残しき」と過去のことにしては。

目をこらし我が子を探す運動会金木犀がほのかに香る

堺 玲子

運動会で大勢の中から自分の子供を探す母の気持ちを詠んだ歌。初めての運動会でのわが子を見る作者の緊張を和らげる金木犀の香りだったのか。高揚しつつ楽しんでる気分が窺える。

◆選者詠

海外で育つわが孫何語にてものを思ふや多言語のなか

ユーチューバー名乗る子と孫それぞれの動画で見たり猫とジェット機

第742回

俳句

長男を背負い巡りし天の川

早川 祥三

御造宮奉賛者御芳名

(令和七年十月
(順不同・敬称略))

五〇、〇〇〇円

北九州市

佐々木滋寿子

一〇、〇〇〇円

松山市

渡部 聡

尾道市

菅 秀和

吹田市

和田 麗

五、〇〇〇円

小郡市

萩原 謙一

川越市

江尻 肇

大阪市

小玉 淳

北足立郡

栗原知華子

加美郡

菅原 成子

姫路市

神谷 龍慶

奈良市

佐野 宏

松江市

藤江 美紀

出雲市

勝部 恵理

松江市

春木 修子

岐阜市

太田 知里

豊前市

玉浦誠次郎

豊前市

玉浦千恵子

さいたま市

河野久美子

宇治市

辻 喜代治

日野市

青柳 里香

京都市

綾木 亜実

江東区

田崎 朗子

朝倉市

豊嶋ヤスヨ

朝倉市

内田 恵子

目黒区

秋山 知隆

高知市

依光 紀明

宗像市

ハナダ写真館山下隆義

北九州市

麻生奈緒美

二、〇〇〇円

大阪市

松浦美紀子

福岡市

宮野 誉大

札幌市

中西 完二

福岡市

上木 理恵

四日市

野中 知美

1月 まつりごよみ

| | | |
|-----|-----------------|-------|
| 1日 | 歳旦祭 | 午前9時 |
| 3日 | 元始祭 | 午前9時 |
| | 引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭 | |
| | 宗像護国神社新年祭 | 午前10時 |
| 10日 | 恵比須祭 | 午前10時 |
| 15日 | 総社月次祭併成人祭 | 午前11時 |
| | 引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭 | |

編集後記

娘が近頃、熱心に見ている

「ゲゲゲの鬼太郎」。作中に「昔は妖怪が住める場所が残され、人間と妖怪が共存していた……」この言葉がある。戦後の高度経済成長期、山林が削られ、工場建設や宅地開発が急速に進められた時代背景であろうが、示唆に富む一言である。水木しげる氏の原作漫画を昭和四十三年にアニメ化。その後もテレビや映画で繰り返し制作され、現在まで親しまれている▼当地では十月末、第十二回宗像国際環境会議が開催された。温暖化や磯焼けなど環境課題に向き合い、保全を目的として継続している取り組みである。妖怪を自然の象徴と捉えるならば、「ゲゲゲの鬼太郎」は五十年前以上前から自然破壊への警鐘を鳴らし続けてきた作品とも言える。娘と共にアニメを見ながら、改めて自然と人との関わりを考えさせられている。

(鈴)